

心理学部で学んだ思い出，続く今，未来。

首藤 祐介

ご存知のように、学問としての心理学の歴史は古く、日本初の心理学科が東京大学に開設されたのは1904年である。しかし、単独の学部としての「心理学部」が誕生するまでには1世紀あまり待たなければならない。中京大学に心理学部が誕生したのは2000年。その前年、私は幸運なことに受験生であった。

元々思い悩むのが得意な性質を持ち、また高校で傾倒していた弓道の経験から「集中力」に興味があった私は、進路選択を意識する高校2年生中頃より心理学方面に進みたいと希望していた。しかし、数学や物理が好きという理由だけで理数系クラスに在籍していた私は、当時の多くの「文学部」心理学科に行くことに漠然とした抵抗を感じていた（今思えば浅はかな考えだが）。その状況の私にとって、日本初の心理学部として、基礎、応用、臨床、発達の4領域を有し、様々な心理学を学べる中京大学心理学部はこの上なく魅力的だった。

大学の講義は全てが面白かった、という言い過ぎかもしれない。しかし、向井希宏先生の心理学概論からは思ってもいなかった様々な場所で心理学が活かされていることを学び、永田法子先生の心理学講読演習から英語さえ読めれば世界の心理学の知識にアクセスできることを知った。鬢薙一夫先生のギター演奏を聞かされる、もとい聞かせていただける心理学基礎実験演習からは、錯視現象等を通してデータに基づき論を主張することの重要性を習った。アセスメント実習で垣間見た鈴木睦夫先生のTAT（Thematic Apperception Test: 絵画統覚検査）の知識の深さからは、臨床心理学者が研究対象に向ける愛情にも似た直向きさを教えていただいた。空井健三先生の臨床心理学概論の内容はさっぱり覚えていないが、合間に挟まれる臨床についての含蓄のあるお話は今でも私の中で生きている。全ての先生のお名前を挙げることはできないが、全ての先生の講義に熱意があり、講義で扱われた知識以上の体験をくださった。

日本初の心理学部に集った学生達も熱かった。1年生の頃は、数多の学生が涙を飲む加川元通先生の心理統計学の講義に合格することに意欲を燃やし、毎日のように仲間を集まり勉強をした。思えば、妻との出会いも統計と一緒に勉強したことがきっかけだった。その点でも加川先生には感謝してもしきれない。もう少し上級生になってから大学院を目指すための勉強会を仲間や後輩と始めた。時には「恋愛に心理学を活かすには」といったテーマで熱く語り合ったり、「行動療法は表面的だけれど、精神分析はその点……」「いやいや、エビデンスが示すのは……」と心理療法の歴史をなぞるような議論を、半ば喧嘩のようにしたりもした。視野の狭さと勢いに任せた乱暴な議論だったが、自分自身の立ち位置を見つめ、道を見据える上で必要なプロセスだったと思う。議論に付き合ってくれた友人達には本当に感謝している。

私にとって大きな出会いだったのは久野能弘先生との出会いであった。久野先生はご自身のゼミを紹介する際「ワシのゼミはどこよりも厳しいでえ」とおっしゃった。嘘である。課題についてもそれほど厳しく言われることはなく、むしろ良くも悪くも自由であった。しかし、久野先生の凄いところは、努力したことに対してすかさず「よっしゃ、よっしゃ」と気づいてくださる点だった。そのためだろうか。卒論発表会には、進学組も就職組も関係なく、「久野ゼミの研究力の高さを見せつけてやる!!」とゼミ生で一致団結して挑んだ。そこには久野先生への感謝もあったのだと思う。

久野先生には2つ大事なものをもらったと思っている。1つは「人とのつながり」である。当時の久野ゼミは臨床心理相談室にて実施される発達障害児への行動療育中心に回っており、大学院生はケース会議や課題の作成のため昼夜問わずゼミ室を出入りしていた。学部生であった私も課題作成や記録の手伝いという形でケースに関与させていただいたが、先生や先輩方は目に見える形で子ども達に行動変容をもたらしていた。その姿に憧れ、臨床の道を志す原動力となった。また、月に1回開催される研究会では様々な一流の先生をご紹介いただいたが、博士課程以降ずっとお世話になる坂井誠先生にお会いしたのも、この時であった。先輩方は今も憧れであり、後輩にも未だ

にいろいろお世話になっている。

もう1つは少し大袈裟に言うと「臨床家としての魂」かもしれない。久野先生は常々「治らない患者はいない。治せないセラピストがいるだけ」「セラピストにとって治すという成果が全て」とおっしゃっていた。少しばかり世間慣れしてしまった今なら、いつも最善の結果を出せるとは限らないし、障害や問題を持ちながらも自分らしく生きることを支える支援も重要であることを知っている。しかし、久野先生のおっしゃりたいことは「それでも治すために努力しろ。ちゃんとクライアントが生活できるようにしたらないかん。治せるセラピストを目指せ」ということなのだとは私は思っている。厳しい言葉だと思うし、失敗ばかりの初心者の頃はこの言葉に苦しめられた。しかし、臨床家は学び、悩み抜き、生涯をかけて、そして世代を超えて「クライアントに貢献できるセラピスト」を目指さなければならない。臨床家の端くれとして、今でもそう信じている。指導教官との出会いは素晴らしいものだったが、これは私だけに限らない。私の指導教官が久野先生だったのでその思い出を語ったが、すべての人に指導教官の思い出と感謝があるに違いない。

さて、最後に心理学部1期生の活躍を少しだけ紹介したい。同じく1期生の柳澤博紀君と今野高志君は同じ臨床の道を志して切磋琢磨した仲だが、20年経った現在も親交がある。学年的には数年下の瀬口篤史君に率いられ、研究会を開催したり、共に学会発表をしたりしている。写真は2017年のものだが、2020年も認知・行動療法学会第46回大会にて臨床実践に関する自主シンポジウムを開催した。瀬口君の優秀さは彼本人の努力によるものだが、同時に年々中京大学心理学部のレベルが上り続けていることを裏付ける証拠でもある。心理学部で共に学んだ彼らは今でも目標であり、ライバルであり、良き仲間である。さらに、心理臨床学会や他の学会大会に参加すれば、同期や先輩・後輩の姿を必ず見かける。他の同級生達もそれぞれの職場や分野、家庭できっと活躍しているに違いない。

2000年、入学した時には想像もできなかったが、私は今、大学で臨床心理学を教えることを生業にしている。果たして自分が受けたような教育を、そして熱意を学生たちに提供できているだろうか？ いや、まだ足りない。中京大学心理学部で先生方に教えられてきたことをさらに洗練し、次の世代に渡していきたいと思う。

(広島国際大学 健康科学部 心理学科)

2017年 日本認知・行動療法学会第43回大会（新潟）自主シンポジウム8「クライアントに役立つターゲット行動と行動指標の選択」の際の写真



左から、今野高志君、柳澤博紀君、首藤祐介、瀬口篤史君